うずまきモエギ、NARUTO世界に生きる

ココスケ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

八尾・牛鬼を生後まもなく封印され、死亡フラグと共に生きる事となったうずまきモエギ。

父から薙刀を受け継ぎ、木遁と医療忍術を引っ提げて原作崩壊済の世界で生き延びる。

目次

第1話 1
第2話 4
第3話 6
第4話 9
第5話 12
第6話 15
第7話 17
第8話 20
第9話 22
第10話 24
第11話 27
第12話 30
第13話 33
第14話 36
第15話 39
第16話 43
第17話 47
第18話 50
第19話 52
第20話 56
第21話 59
第22話 61

第1話

「はぁ…はぁ…一緒に生きてあげられなくて…ごめんね…ごめん…でも…お母さんは…ずっと、見てるから…牛鬼、この子を…よろしく…ね…。

アナタ、もう、大丈夫よ…私の分まで…よろしくね…愛してるわ。」

「僕も…愛してるよ…この子を、育ててみせるから安心してくれ。…鉄甲封印。」

この日、八尾・牛鬼の人柱力がうずまきグレンから娘であるうずまきモエギへと移った。

出産に耐えきれなかったグレンが息を引き取る直前、牛鬼が引き抜かれてモエギへと封印されたのであった。

「…僕に、人柱力としての適正があれば…この子に重荷を背負わせる必要も無かったのにな…」

悔しげに声を震わせるグレンの夫、ハクレイはそっとモエギを抱きしめた。

え…人柱力？牛鬼？…え？

両親と思わしき男女が話していた内容には、忍者風魔法使いの漫画の世界に出てくる単語が含まれていた。

駅のホームで押されて電車に轢かれて死んだことは分かる。

記憶を保持したまま産まれた事も…混乱してはいるが、まあ分かる。

だが、漫画の世界に転生？しかも、死亡フラグ満載の所へ？…分かってたまるかである。

そもそも、牛鬼は雲隠れの里のブルービー、又はキラービーに封印されていた筈だ。

少なくとも、赤毛の女性では無かった。

それに、父と見られる人が霧隠れの額宛を付けていた事も気にな

る。
　既に原作崩壊済であり色々と違う事が出てきているとも考えられる。
　色々考えていると、上の方から声がかかる。
『なぁ、お前…まさか、さっきの赤ん坊か？』
「う、うん…多分私がそうだと思うけど…。」
『なんで赤ん坊が自我を持ってるんだ？』
「多分、転生者ってやつ。…しかも、ＮＡＲＵＴＯの世界に。
　教えて欲しいんだけど、ここがどこの国か分かる？」
『転生…か。ＮＡＲＵＴＯが何かは知らんが、色々と混乱しているみたいだな。
　ここは水の国、霧隠れの里だ。お前の両親はうずまき一族で、うずまきの国が無くなってから霧隠れにやってきた。
　霧隠れとしても封印術に長けたうずまき一族の２人を受け入れた。グレンが俺の人柱力だったって事も大きいが。』
「…なんでうずまき一族に、牛鬼が封印されてたの？」
『そりゃ、木ノ葉隠れと友好国だったからな。
　九尾程では無いが、俺のチャクラも普通の奴に封印すれば大変なことになる封印が難しい部類に入る尾獣だった。
　だから、封印術に長けたうずまき一族にって訳だ。』
「原作知識ポンコツ化のお知らせ…」
『原作ってなんだ？お前はこの世界を知っているのか？』
「前世の世界で人気だった忍者風魔法使いが闊歩してる世界なら…」
『忍者風魔法使いってなんだよ!?そんな人種聞いたことねぇぞ？
　ほら、取り敢えず拳を合わせろ。記憶を読み取って一緒に考えてやる。』
　そういって、私の体より何倍も大きな拳を突き出す牛鬼。
　それにそっと拳を合わせると、何とも言えない暖かさを感じる。
『お、おう…なんかお前の前世ってすげぇ楽しそうな所だな…。取り敢えず、知識は読み取れた。

この精神世界では、外とは時間の進みが違う。
赤ん坊の間に知識の擦り合わせとチャクラコントロールと基本忍術、医療忍術と…白毫の術を教えてやろう。』
「…白毫の術って、綱手が開発した術じゃないの？」
『元はうずまき一族の術だ。綱手は祖母のミトから教えてもらったから出来ている。
まぁ、うずまきでも白毫を納める事が出来るは限られてはいるがな。
そもそも、白毫の術をうずまき一族が使うのとうずまき以外が使うのでは効果に開きがある。
遥かにうずまき一族の方が向いている。
ここら辺も、お前の知識と違うな。』
「ふーん…ま、死亡フラグも牛鬼がいれば何とかなるでしょ。」
『あぁ。お前は簡単には死なせねぇ。お前の母…グレンとの誓いでもあるからな。
人柱力が死ねば、尾獣も一時的にではあるが死ぬ…だから、俺らは一蓮托生だ。』
「うん！
それに…牛鬼の力を悪用させない。」
うずまきモエギ生後1時間、牛鬼と共に死亡フラグを折る事を決める。

第2話

「お父さん、おかえりなさい。」
『ハクレン、おかえり。』
「ただいま、モエギ、牛鬼。」
うずまきモエギ、4歳。
肩乗りサイズの牛鬼が外に出て説得してくれたため、父の任務中は1人でお留守番出来るようになった。
上忍として有名な忍である父だが、なるべく早く帰ってこれるよう水影様にお願いしているらしい。
「お父さん、お怪我無い？」
「大丈夫だ。優しいな…モエギは。」
（医療忍術の実験台になって欲しいだけだと思うがな。）
牛鬼に何か失礼な事を言われた気がしたが、はぐらかされることが分かっているため何も言わない。

「モエギ、今日の午後からお父さんの仕事に着いてきて欲しいんだ。」
『まて、モエギは確かにチャクラコントロールや医療忍術、封印術も俺が教えたからそこらの忍よりも上だしもうすぐ白毫の術も完成する。だが…』
「いや、別に戦闘がある訳ではないよ。
今日、新しく人柱力になる2人の男の子がいるから会わせたいって水影様から言われてね。」
「分かった。」
『2人…三尾と六尾か。人柱力は？』
「二人共8歳の男の子。やぐら君と、ウタカタ君だ。」
え…二人共原作キャラじゃないですかー…。
しかもやぐらって操られて血霧の里って呼ばれる恐怖政治を敷いた4代目水影…。

「お父さん、部屋で本読んでくるね。」
情報整理しなければ…。

さて、知識の整理をしよう。
現在、霧隠れは3代目水影がトップに着いている。だが、原作開始よりかけ離れた世代かというとそうではない。
うずまきナルト…この世界では波風ナルトは私の1ヶ月後に誕生している。波風ミナトを父に持ち、母が出産の折に亡くなった為人柱力となった。
奇しくも私と同じ境遇である。
やぐら、ウタカタは4歳上、ナルトと同い年。
さて、水影ってどうやって決まるのか。
そもそも、原作のやぐらは身長143cmとかなり小柄で子供にしか見えないのに、水影様であった。
水影はその時に一番強い忍がなる。
水影が亡くなる、又は水影が辞任し、空席になってからトーナメントが行われ水影は決まるのだ。
現時点でやぐらは8歳。
原作開始時点で水影は照美メイに変わっていた。
波の国編では、10年前に再不斬が卒業試験で自分以外の生徒を皆殺しにしたと言われる。
だが、現時点では起きていない…というより、試験内容は木ノ葉と変わらない。
計算が合わないのはそういうものだと割り切って行くしかないと考えるのを諦め、チャクラコントロールの修行を開始した。

第3話

修行で額に白毫の術が現れ、大騒ぎしたのはつい先ほどの事だ。
私は庭の木の下で座り、タコ足でリンゴを2つとって一つを牛鬼に渡し、一つを自分で食べ始めた。
木遁の適正がある事が分かってから、医療忍術に加え木遁も修行内容に加わっている。
恐らく、柱間の様な大規模なものでは無いだろう。あれは、特殊な要因が重なって現れた希な例だ。
「モエギ、そろそろ出ようか。」
「分かった。」
部屋に戻り、身だしなみをチェックする。
モエギという名前の理由にもなった、萌黄色の瞳。クルリとカールした長い赤茶のまつ毛とぱっちりとした二重まぶた。
額には、白毫の印が刻まれ、フワフワの赤い髪はボブヘアに切りそろえられている。
前世の言葉を借りるなら、「お人形みたい」である。
自分の顔ではあるが、可愛いと思う。
良くもなく悪くもない前世の顔を知っているから、余計にそう思う。
中身がアレであるのが残念でならない。

父と一緒に水影室に入ると水影様は勿論、2人の老人と2人の男の子がいた。
現在人柱力である、2人の老人。
新しく人柱力となる、ウタカタとやぐら。
父は水影様に挨拶をして、新しく人柱力となる2人に目を向ける。
「初めまして。封印を担当させていただく、うずまきハクレンと申します。

こちらは娘のモエギと八尾の牛鬼。」
ふ、２人が幼い…可愛い…！
クール系のウタカタと、プリチー系のやぐらだ。
「ウタカタだ。よろしく。」
「僕はやぐらだ。よろしくな、モエギちゃん。」
イケメンの後光が、私の緊張感を煽る。
やめてよ、コミュ障を煽らないでよ…！
「よ、よろしく…お願いします…？」
『なんで疑問形なんだよ…俺は牛鬼。
スマン…こいつ、ちょっと人見知りでな…。』
「ハクレン、娘さんの…モエギちゃんはもしかして、白毫の術を体得しておるのか？」
水影様―６０歳程のおじいさん―は、私をじっと見つめて聞いてきた。
「はい。今日、白毫の印が出てきまして…。」
「白毫の術？」
やぐらが、頭の上にハテナを浮かべて聞く。
可愛く首を傾げるショタやぐら。
「確か…数年間常に一定量のチャクラを額に溜め続けることで刻むことができる、精密なチャクラコントロールを必要とする術だの。」
「はい。白毫の術で力が数倍は上がり、創造再生という〝再生〟能力も白毫の印を解放する事で使用出来るようにもなります。」
『ま、代わりに寿命が減るがな。
モエギは、白毫を教えてから1年で貯めた。』
「優秀なのだな、モエギちゃんは…。」

里から離れた水辺。
そこで、人柱力への尾獣の移し替えを行った。
老人―ロンさんとリンさん―の最期は、笑顔であった。

『六尾、三尾共に穏やかな性格だからすぐに仲良く慣れるさ』

「ありがと、牛鬼！」

いい笑顔で返すショタやぐらを見れただけで…とても美味しいです。

第4話

アカデミー生2年目の初夏。
7歳になった私は、アカデミー校舎前である事件に巻き込まれる。
「も、もう…やめて…」
「痛い…嫌だっ…」
「ふんっ…男女の癖に俺らに命令してんじゃねぇよっ！」
ドカッバコっと、かなり力をいれて人を殴っている事が分かる。
これは…助けなければ。
「…何してるの？」
「見て分かるだろ？コイツらの調教だよ。」
得意げにリーダー各の男子生徒が見せたのは、殴られてボロボロになっていた―白と長十郎であった。
「…調教が必要なのは、貴方のほうじゃないの？」
「な…」
何か言い返す前に、リーダー各の男子生徒の顔に平手打ちをし、殺気を出す。
「ゴミ虫の分際で人間の真似をしてんじゃ無いわよ。さっさと失せろ。」
「ひ…ヒィッ…」
全員逃げ去っていくのを確認し、殴られていた白と長十郎に医療忍術を使う。
普通の医療忍者よりも回復速度が段違いな私の医療忍術は、スグに2人の傷を治す。
「もう、痛いところは無い？」
「は、はい…ありがとうございますっ！」
「ありがとうございます！貴女の…お名前を…」
「私は、うずまきモエギ。」
私はそれだけ言い残し、立ち去った。
後ろからの熱い視線に気付かぬまま。

「おはようございます、モエギ様。」
「お、おはよう…。」
いつの間にか、白と長十郎の２人が私の下僕の様になっていた。
私をモエギ様と呼び、執事の様に私の身の回りの世話をする。
（どうしてこうなった）
『（昨日助けてから２人の中ではお前は天使様になってる。こうなった人間はどうしようもない。諦めろ。）』
帰る時も護衛と称しストーキングされ、どうやって振り切ろうか悩んでいると校門に見慣れた２人を見つけた。
「やぐらさん、ウタカタさん！」
「ぬおっ！ってモエギ…毎回飛びつくのは辞めろって…ん？あの２人は誰だ？」
やぐらさんの目線の先には、少し離れた所から私達を監視している白と長十郎がいた。
「ストー…んんっ、断っても着いてくるから２人に助けてもらおうと思って。」
『あの２人がいじめられてたのを助けたら信者になった。着いてくるのは護衛だからしいぞ。』
「そうかそうか…で、いつまで俺に張り付いているつもりだ？」
「…ダメ？」
『しばらくしたら気が済むから自然と剥がれると思うぞ。』
「なら張り付いている間に俺が言ってこよう。」
「…分かったよ。ウタカタ、頼んだ。」
やぐらさんは仕方ないなとばかりに私の頭を撫でる。完全に妹を見る目ではあるが、頭を撫でられるのは気持ちいい。
「モエギ…なんでいつも俺に張り付くんだ…」
「張り付きがいがあるから。」
「張り付きがいってなんだよ!?何基準だ？」
「…体温と匂い。暖かいしいい匂いだし…」

『お前…前世猫だったりしない？』
「に、人間だったはずだもん…多分。」
　気が済んでやぐらさんから離れると、やぐらさんの顔が少し赤い事に気付く。
「やぐらさん…どうしたの？」
「…何でもない…ぞ？」
『モエギが可愛すぎるから照れてるんだな、分かるぞ。』
「な…確かに可愛いけど…そういう意味では…妹みたいなものだし…。」
『俺、〝モエギが可愛すぎるから照れている〟としか言ってねぇぞ？そういう意味ってどういうこどだ？ん？』
「牛鬼、からかわないの。」
　他愛もない話をしていると、疲れた様子のウタカタさんが戻ってきた。
「アイツら…話が通じない。信者怖ぇ…。
　ストーカーは辞めるように言ったが…信者状態を解くのは無理だった。」
「「…。」」
　いつもクールなウタカタさんがこの様子である。
　…信者の力ってスゲー！

第5話

「お父さんは今日任務だっけ…」
『帰ってくるまでに修行と畑の収穫と餌の準備を終わらせないとな。』
「そうだね。」
庭に出て、長い棒のような物―修行用の薙刀を取り出して基本の型を繰り出す。
薙ぎ払い、突き、振り回し…演武はのように薙刀を使いこなせるのは、父親の姿を見てきたからだろう。
薙刀使いとして有名な忍であるハクレンは、家ではのほほんとした1人の父親である。
一通り薙刀の練習が終わり体が温まると、右の手のひらに刻まれている薙刀の印に触れる。
その瞬間、モエギの手には薙刀―刃が付いた、実践用の薙刀が現れた。
収納の印は、うずまき一族の秘伝技とも言える。
手に持った薙刀は、父の薙刀の様な特別な何かがある訳でもない護身用に持たされた無名の薙刀。
だが、正真正銘初めて持った薙刀で思い入れはある。
木遁で木の人形を作り、切れ味を確かめ、一通り薙刀を振り回した後は体術の修行に入る。
拳にチャクラを溜めて、地面を叩けばマンガのように地面は壊れていく。
所謂、桜花衝と呼ばれる術である。
自分で言うのもなんだが…ゴリラ化している気がする。
地面は土遁で整え、部分尾獣化―牛鬼の腕と尻尾を出し、演武を披露していく。
修行は、父が帰ってくる前に終了した。

「木遁・実作りの術！」
ピーマン、モヤシ、人参、アスパラなど無秩序に野菜が現れる。
自分でやっておきながら…現実感が無い図である。
「木遁・収穫の術！」
野菜から手足が生えたかと思うと、自分で歩いて籠の中へ入っていき、手足は消える。
やはり、現実感が無い図である。

「野菜炒めの完成。」
「『いただきます。』」
白いご飯とお味噌汁、野菜炒めと質素ではあるがかなり豪華な物だ。
米も野菜も全部木遁で補っているため、材料費も安上がりで、私のチャクラが濃いためかなり美味しく出来上がっている。
あっという間に食べ終わって、のんびり過ごす時間。
父親のハクレンが、話しかけてきた。
「モエギ、明日はアカデミーは休みだろう？
どこか出るのか？」
「はい、調味料が残り少ないため、買いに行こうかと。」
「…気を付けてね。危ない事があれば木遁飛雷神ですぐに逃げる事。」
「はい、分かってます。」
『俺もいるから大丈夫だ。』
「…そう…だね。」
父が買い出しだけでこんなにも心配するのは、親馬鹿だから…でもあるが、人柱力にとって避けられない宿命である、迫害や暴行、誘拐の危険性がある為だ。
赤い髪というのは、かなり目立つ。
うずまき一族が各地に離散して、隠れて生きている人間もいる。
ある意味、外見的特徴で特定されやすい人柱力だ。

私も7年間生きてきて、迫害の洗礼を受けた。
精神的には大人であった為、少ししんどいな…位であったが、普通の子供であれば…グレる。
いや、グレるだけであればマシだ。闇堕ちしてもおかしくない。
転生して、原作ナルトを心から尊敬した。
今でこそ、普通に接してくれる商人さんは見つかったが…その店以外では商品は売ってくれない。
道を歩けば避けられ、蔑まれる。
同年代の子供も、大人の真似をして似たような表情を浮かべる。
だが、生まれてきた事を後悔なんてしていない。母の分まで一生懸命生きると決めている。
明日買いに行くものをメモに書き出して、ベッドへと入った。

第６話

「お姉様、こんにちは。」
「こんにちは、モエギちゃん。」
私がお姉様と呼んだフワフワとした金髪の美女は、私の方を向いて優しげに微笑んだ。
お姉様との出会いは一年前。
路地裏に引き込まれて暴行を受けていた私をお姉様が助けてくれた事がキッカケだ。
お姉様は、忍をしていたが引退して商店を営んでいると教えてくれた。
私が人柱力だろうと、普通に接してくれる貴重な存在である。
「お姉様、お醤油と味醂を下さい。」
「お醤油と味醂ね？…合計６００両よ。」
お金を渡し、商品を受け取って家に戻っていくと、視線を感じる。
「…出てきたら？」
「やっぱりバレました…さすが、学年一位の天使様…」
「なんで…周りの反応…見たでしょ？」
私は、商店街を歩き続けてきた。
道は開き、蔑まれ、陰口、悪口は当たり前。
そんな周りの状況が見えないはずはないのだ。
「周りが何を言おうと、モエギ様は僕達の天使様ですから。」
「モエギ様がなんと言おうと、俺達は貴女を追いかけます。」
「…私は人柱力よ？八尾の人柱力…人間では太刀打ち出来ない尾獣が封印されてるの。だから、避けられる。人間は弱いから。
私に近づけば同じように扱われるわよ。」
「モエギ様が僕達を助けてくれた…その時から、モエギ様に付いていくと決めています。」
「俺もですよ。
尾獣と人柱力を一緒にして白い目で見る輩よりも、モエギ様の方が１００倍も信頼出来る。」

「もう…付いてこないで。」
２人を拒絶するような言葉に、２人の表情は歪む。
「後ろをちょろちょろ付いてこられると気が散るのよ。歩くなら堂々と隣を歩きなさい。」
それだけ言い、私は立ち去った。
その横を付いていく２人の影は、モエギの影の近くに伸びていた。

庭で木遁でミカンを作り、収穫し終わった頃、見知ったチャクラを感知した。
「やぐらさん、ウタカタさんっ！」
ボフッと効果音が付きそうな程勢いよくやぐらさんに飛び込んだ私を、やぐらさんはよろけずに受け止めて、困ったような顔をする。
「なんでいつも飛び付いて来るかな…」
そう言いつつも、頭を撫でてくれる。
大人しく頭を撫でられていると、牛鬼から声がかかる。
『お前ら、なんか用事か？家に来るなんて珍しいじゃねぇか。』
「おじさんに頼まれてね。娘がちゃんと帰っているか確かめてほしいって。」
「報酬は庭の果物を好きなだけって言われた。」
『あ、そう…庭ならあっちだ。モエギ、適当に果物作れ。』
「ん。」

第7話

モエギが8歳になり、やぐらさんとウタカタさんがアカデミーを卒業した。
父が担当上忍となったため、2人にお祝いとしてネックレス（幻術無効効果付き）をプレゼントした。
子分の白と長十郎に修行を付けるようになり、私も忙しくしていた。
「今日はこれで終わりにしましょう。
果物好きなだけ持って帰っていいわよ。」
「モエギ！モエギはいるか⁉」
「…なんかあったみたいだから行ってくる。」
父の声が聞こえた方へ行くと、任務帰りの父とウタカタさん、やぐらさんと恐らくスリーマンセルを組んでいる女の子がいた。
女の子の足は血だらけで、少し焦った表情の父が背負っている。
「この子が怪我しちゃって…治せる？」
「ん、治す。」
父が女の子を下ろし、医療忍術を施していく。
独特の緑色のチャクラが患部を包み込むと、怪我の痕跡させ残さず治した。
「他に怪我ない？」
「もう大丈夫だよな？…助かった。」
「ありがとう。」
女の子―照美メイが笑顔で例を言ったため、それに応えると、いつも通りやぐらさんに突撃する。
いつも通り、暖かい体温と花の香りだ。
やぐらさんも頭を撫でてくれた。
『なぁ、庭にあの2人放置してるが良いのか？』
「あ、行ってくる…。」

「ごめん、怪我人がいたみたいだったから治してきた。もう大丈夫よ。」
「さすがモエギ様…水の国でモエギ様に医療忍術で勝る人は居ないのでは？」
「本職の人には負けるでしょ…私の医療忍術なんてほぼ独学なんだし…牛鬼には教えてもらったけど…。」
「いや、霧隠れの里でモエギほど医療忍術に長けている人はいないさ。」
私の否定的な言葉に、庭に出てきた父が反論する。
「そもそも、白毫の術を体得するほどチャクラコントロールに長けているんだ。
チャクラ量が多いから燃費も良いし、創造再生・白毫の術は寿命を縮める代わりに致命傷を受けても再生出来る。つまり、戦場の最前線でも治療可能だと言う事だ。
治療所まで連れていく事が困難な場合も多いからね。」
「やはり…モエギ様は、天し…ぶへっ…！」
天使様と言いかけた白を殴り黙らせる。
『お前…なんでわざわざ地雷を踏みに行くような事を…。』

子分2人を帰らせた後、5人で果物を食べる。
木遁も、草結び、眠り粉や痺れ粉などのポ〇モン風の技を使ったり、くしゃみと咳が止まらなくなるという嫌がらせのような花粉を飛ばせるようになった。
完全に嫌がらせの方向へシフトしている気がするが、本来の木遁とはこんな物だ。
柱間は転生体がゴニョゴニョだったりするので、あれは木遁と呼ぶより柱間遁と呼んだ方が近いだろう。
本来の木遁は嫌がらせにて最強である。

「ねぇ、モエギちゃんって…やぐらの事好きなの？」
メイさんが私に聞いてきた。
コミュ障な私とは無縁の女子トークというやつだろう。
「…嫌いじゃない。」
「ふーん…」
女子トークの便利技、〝嫌いじゃない〟
好きな人本人が目の前にいる場合や、〝好き〟のベクトルが違う場合に使える。
私の場合は前者である。
「モ、モエギちゃん!?やぐら…モエギちゃんはやらんぞ!?」
「お父さんうるさい。」
「やぐら…まさか…幻術を!?」
「お父さん、因縁付けちゃダメ。
だから言ってるじゃない…嫌いじゃないって。」
『ん、つまり好きって事か。…ハクレン、そろそろ娘離れの準備しとけよ。』
「牛鬼、ややこしくしないでよ…。」
牛鬼がトドメを刺して○―？―＿の状態になっている父が復活したのは３０分後である。

第8話

ハクレン小隊が結成され一年。
主にCランク任務を行っていた4名だが、2日間Bランク任務に出向く事になった。
Bランク任務と言えば、他国の忍者と戦闘になる可能性がある任務。
待つだけなのがこんなにも不安になるとは思わなかった。
だが、予定では今日の夕方帰ってくる筈だ。
『なんか…嫌な感じがするな。』
「ん、不安になる。」
アカデミーから帰ってきて1時間。
夕方になり、嫌な予感が募る。
それが的中していたと知るのは、それから1時間後の事である。

インターホンがなり、来客を知らせる。
…父は、鍵を持っている筈だ。嫌な予感で心臓がバクバクとうるさく感じる。
「…はーい。」
玄関を開けると、父はおらず、やぐらさん、ウタカタさん、メイさんの3人のみであった。
3人とも表情が暗いし、所々怪我を負っている。
『…お前ら、どうした?何があった。』
「先生が…俺を庇って…亡くなった。」
やぐらさんから発せられた言葉で、時が止まった。

それからアカデミーへ登校を再開したのは一週間後であった。

書類諸々は水影様がやってくれた。
葬式を行い、遺品の薙刀を貰っても実感は湧かず、一週間帰ってこなかった事で受け止められた。
不思議と涙は出てこない。
寂しいとは思ったが、その分牛鬼が居てくれた事で隙間を埋められた気がした。
3人とも私達を心配してよく家に来るようになった。
特に、やぐらさんは。
のめり込むように薙刀の修行をする内に、時は流れていく。

「白、長十郎…ありがとう。」
父の2回目の命日。
いつの間にか2年も経っていた。
白と長十郎と共に墓参りをした。
3人はもう来ていたらしく、墓が綺麗になって花が生けられていた。
私達の花も生けてお参りを済ませた後、日課の修行をする。
赤い柄の薙刀は、父が使用していた遺品。
風遁を使って斬撃を飛ばせるようになるなど、私も立派な忍者風魔法使いとなっている。
サイのように墨で何でもできるような修行も行い、羽根で空も飛べるようになった。
移動が楽になるし戦闘の幅が広がった。

第9話

１２歳、アカデミー卒業を控えたある日…水影が〝４代目〟へと変わった。
就任式の日、パレードを見に行ってみれば小柄なやぐらさんの水影衣装姿が目に写った。
やぐらさんがついに水影になったのだ。
『いや～原作とは時期はズレているが…４代目な事には変わりねぇな。
幻術無効ネックレス渡しといて良かったな…。』
原作知識を共有し、原作ではやぐらさんの時代は血霧の里と呼ばれた事を知っている牛鬼は、ホッとした様子であった。
「そもそも洗脳は起こるかは分からないし…あれが写輪眼にどれほど効くかは未知数よ。
…今でもしてくれているかは分からないし。」
『お前さ、やぐらの事…その、好きなんだろ？アピールしないのか？』
「…釣り合わないって自覚してるしいいの。」
『お前可愛いのに…それは分かってるだろ？横に並んでも見劣りしねぇって。』
「見た目だけはね。…他はマイナスだし。牛鬼がいなければ今頃死んでるわよ。」
牛鬼が言うように私の自慢できる所は、見た目位だ。
何度も告白されたし、前世の知識から鑑みても可愛いと断言出来る。
だが、それだけではダメなのだ。
中身が致命的に残念すぎるし、牛鬼がいなければ何回か来た暗殺者達を退ける事は難しかっただろう。
やぐらさんの様な人に、見た目だけの私は釣り合わないばかりかアピールすることさえはばかられる。
だから、気持ちに蓋をしておく。

やぐらさんの目は、こちらを向いてはいない。一方通行だろうとやぐらさんの事を見る事が出来るだけで儲けものである。

「お前らの担当上忍になった桃地再不斬だ。
お前らの能力は把握しているし、修行の中で見ていくから試験は行わない。
明日から任務を行う。朝８時、第二演習場に集合。解散！」

それだけ言うと再不斬は去っていった。
…試験があると思ったのだが。
「こんなに簡単に下忍になれるなんて…拍子抜けですね。」
メガネを掛けて父親から受け継いだらしい忍刀ヒラメカレイを背負った長十郎が口にする。
「…試験を行わないだけで、まだ合格と決まった訳ではないのでは？これからの勤務態度で決めるとか…」
推測を口にする白の容姿は、ますます原作開始時に近づいている。つまり、女にしか見えない。
「ま、何とかなるでしょ。」
『楽観的だな…。』
３人の首には、新品の霧隠れの額宛てが掛けられていた。
三者三様の戦い方を見つけ、連携も上手く出来るようになった。

何としてでも、２人を守りたい。
最初は金魚の糞でしか無かった２人だが、私の中で既に仲間だと認識していた。

第10話

下忍になり5ヶ月。
Dランク任務135回、Cランク任務20回、Bランク任務1回を休み無しでこなし、他のルーキーからあの班やべぇ、ブラックすぎwwと認識されはじめた頃。
先生から呼び出しがあった。
「お前らには1ヶ月後、雲隠れで行われる合同中忍試験を受けてもらう。
そのため、受注任務をDランク任務に切り替え、余った時間を修行に当てる。質問はあるか。」
「霧隠れから他に出る班は？」
「いないな。俺が手を挙げるとみんなして辞退しやがった。…腰抜け共め。」
あぁ…確かに私たちがいればね…ご愁傷様としか言いようがない。
下忍になってそうそうBランク任務を終わらせている、人柱力がいる班が出るなら…腰抜けと言われようが出ないという選択をするだろう。

「俺でも完璧にこなすのに半年はかかったのに…一週間で俺より完璧にこなして昇華させるって…」
遠い目をした再不斬と、次は何をするのかとニコニコしている私達。
無音殺人術（サイレントキリリング）を一週間で体得した上、匂いや白眼での感知をやりにくくする霧を発生させるなど、再不斬の十八番を完全に奪った形になった。
『これで中忍試験の合格率が上がったな。
予選の内は手札を晒さずに通れるんじゃないか？』
「牛鬼さんに言われると安心出来ます。」

「そうね、でも…まだまだやれる筈。
　中忍試験ともなれば色々とヤバイ人が居そうだし…。」
「そうですね…格上なんてゴロゴロ居そうですし…。」
「お前らがそのヤバイ人の筆頭だがな。
　それからお前らの格上なんぞ五大国の全上忍の中でも滅多にいないと思うぞ。」
「「『いやいやいや…。』」」
「…嫌味か？お前ら、俺の事を一捻りで殺せる癖に嫌味か？
　それとも休み無しで働かせた嫌がらせか？」
『俺ら以上のヤツなんかゴロゴロいるわ。』
「むしろ八尾以上のヤツの名前が知りたい。里抜けしてでも弟子入りしてくるから。
　お前ら同士の打ち合いは速すぎて目で追うのがやっとなんだぞ…。」
「あれ、先生もう老眼始まったの？」
　それから1時間、先生の体力が尽きるまで鬼ごっこをした。
　手加減も意外と疲れるらしく、スグにバテていた。

　中忍試験直前、明日には雷の国へ出発すると言うことで、早めに修行は終わらせて家に帰って来たのだが…。
「家の前に…」
『不審者が…』
「誰が不審者だ！一応水影なんだけど！」
『あぁ、チビ影か。』
「違うよ、ショタ影だよ。」
「俺はチビ影でもショタ影でも無いっ！水影なの！」
『水影の子供？』
「水影様（自称）」
「も、もう許さないからな。お前らも笑うなぁっ！」

一通りいじった後、家に3人を上げる。
ムスッとしたやぐらさんは、頬を膨らませる。…だからショタ影なんだよな…。

第11話

『んで、突然来たのは中忍試験の事か？』
「ん…あ、そうそう、中忍試験。再不斬の報告書が気になったから来た。」
『…再不斬の報告書だろ？再不斬に聞けよ。』
「聞こうとしたら逃げた。」
「あの人上忍だよね？」
　霧隠れの上忍が水影から逃げるとはこれ如何に。
　原因があるとすれば…
『チビ影、再不斬になんかしたのか？』
「だからチビ影じゃないし…俺の取り柄をアイツらは…って叫びながら消えたから。」
「大体分かった。
　中忍試験の為の修行で、無音殺人術（サイレントキリリング）を教えてやるってドヤ顔で言われたけど簡単に出来ちゃったからみんなで改良を加えたら泣き叫んだ事件があった。」
『あ～あったな、あれ…半年かかったとかどうのこうの言ってたが…嗅覚感知や血継限界にも対応出来るようにしたら…』
「「…。」」
　真実を包み隠さず言えば急に黙り込んだショタ影御一行。
「牛鬼、ショタ影様が黙っちゃった…。」
『お前が自分より大人びてるから泣くのを我慢してんじゃねぇかな。一応年上らしいから…。』
「お前ら…人が黙り込んだ事をいい事に言いたい放題言いやがって…大体、モエギよりは背が高いぞ!?俺は１４３ｃｍ、モエギは１４２ｃｍ、１ｃｍも俺の方が高いんだ！」
『比較対象がモエギな時点でお察しだろ？』
「うぐっ…でも、俺はショタ影なんかじゃない！モエギより４つ歳上の大人なの！」
　ドヤ顔で頭を撫でるやぐらさん。

気持ちよくて目を薄める。…私は前世の前世は猫だったのかもしれない。
ただ単に好きな人だから、というのもあるが。
「…目の前でイチャつくのはやめろ…。」
「そうよ…爆発しなさいよ。」
「い、イチャついてなんかないって！」
『お前…あんなに甘い雰囲気出してたのに気付いて無かったのか？』
「私は撫で撫でしてもらっただけだよ？」
「女の髪は美容師か好きな人にしか簡単には触らせないのよ。
つまり…そういう事よね？」
「？」
『やぐらの事男として見てるのかって事だ。』
ちらりとやぐらさんを見ると、少し赤い顔でじっとこちらを見詰めている。
「私、やぐらさんの事好きだよ？」
どう好きなのかは言ってないが、どう取るかは本人の自由だ。
男として見ているかなんて本人の前で言うチャレンジャーはあまりいない。
女性に対して毎晩お前をオカズにしてるからと申告する男性もまたいないのだ。

「ここが…雲隠れ…。」
あれから話は終わってしまった為、どう取ったかは分からないまま。
ま、やぐらさんの中で私に対する認識が変われば御の字である。
気持ちに蓋をしたのに、至近距離で会ってしまった事で蓋は外れ、割れてしまった。
僅か数話で決意が無駄になってしまった。
とりあえず、今は中忍試験だ。

原作では木ノ葉で行われるはずだった合同中忍試験。
今は、雲隠れだ。
つくづくここは現実なのだと思い知る。
何事も予定調和の様にはいかない。

第12話

「第一試験はペーパーテストだ。
全員席につけ！」
肌の黒い試験官が号令をかける。
２人と隣に座り、カンニング対策もバッチリな訳だが…。
はて、同じ試験なのか…。
「第十問は４５分後に言い渡す。では、始めっ！」
教室内に、カリカリと音が響く。
主に封印術の問題だった為、簡単に出来てしまった。…まぁ、上忍クラスの問題であった事は間違いない。
趣旨は同じだろう。
隣の２人も簡単に解けているようだ。
ペーパーテストに備え、家の巻物を見せていた事が幸いしたのだろう。
うずまき一族の封印術は秘伝忍術に近いものがあるが、基本は同じである。
上忍レベルの封印術の知識が無ければうずまき一族の封印術を理解する事も出来ないだろう。
従って、２人の封印術への理解力は上忍を上回っている。
「よし、４５分だ。
第十問は、１人でも間違えれば連帯責任で班員も不合格となる。
受けて間違えれば…中忍試験の受験資格を剥奪させてもらう。受けるか受けないか…５分以内に選べ。相談は無しだ、自分で決めろ。」
２人をちらりと見ると、問題無さそうだ。
自身に満ち溢れ、この問題の答えも分かっているようだ。

第一試験を通過し、第二試験のサバイバルの説明に入る。

ルールは大体同じだ。
舞台は岩が多い場所で、２６組７８名が競いあい、半分以外に減らされる。
始まりの合図がなると同時に付近の受験者達を金剛封鎖で拘束し、タコ足で巻物を強奪する。
「よし、全部集め終わったわね。行きましょ。」
天・天・地・天・地…
その後、何度か奪いに来た人間もいたが白と長十郎が対処し、逆に巻物を奪う。
ライバルはとことん減らす。
９０分で塔につき、史上最速記録を打ち立てた。
２位が我愛羅達の班だ。
我愛羅のクマが酷いのは同じだが…表情が違う…？
悔しそうではあるが殺気を振り撒いていないしカンクロウとテマリが我愛羅に怯えていない。
原作崩壊は今更だと割り切り、木遁でみかんを出して３人で食べる。
…視線が気になる…確かに、どこからともなく木が現れてみかんがなって当たり前のように食べる奴らがいるのだ。
私も我愛羅達の立場になればガン見するだろう。
「…食べる？」
「…良いのか？」
「いくらでも出せるから。」
みかん、リンゴ、イチゴ、ブドウ、ナシ…取り敢えず思いつくだけ出すと、３人は固まった。
「木遁…？」
「ん。でも、ちょっと便利な血継限界ってだけだよ？
千手柱間みたいなのは出せないし、私が出来るのは嫌がらせみたいな物だよ。あれは木遁じゃなくて柱間遁だから。」
食べながら言うと、困惑しているのが分かる。
が、ちゃっかり食べる３人。

食べ物は人の距離を縮めるのだ。

第13話

最終的に残ったのは、オビト班（７班）、ガイ班、我愛羅達の班、私達の班の４組だけであった。
予選は無し、１ヶ月後の本戦で１２名のトーナメント戦が行われる。
くじを引き、試合の組み合わせが決まる。
第一試合
我愛羅ＶＳうずまきモエギ
第二試合
波風ナルトＶＳ春野サクラ
第三試合
テマリＶＳうちはサスケ
第四試合
日向ネジＶＳカンクロウ
第五試合
ロック・リーＶＳ白
第六試合
テンテンＶＳ長十郎
あれ…シカテマフラグ折っちゃった…？
確かに挑んできた相手の中に猪鹿蝶がいたが…。
っていうより、雲隠れ開催なのに誰も残っていないとはこれ如何に。
…狩ったのは私達なのだが。
やっぱり人柱力が班員にいると強いよな…むしろ全員生身で戦って残ったガイ班がやばい。
取り敢えず初戦から仲間同士で潰し合いにならずに済んだ。
再不斬が予選通過の報告の鷹を飛ばし、これから１ヶ月の修行は別々に行う事も増える事を私達に告げた。

「牛鬼、新技の開発を行います。」
『そうだな、アイツらの度肝を抜くような…派手で高火力の…』
「やりすぎるとオーバーキルで死んじゃうから、威力を調節出来たらいいなとは思う。」
『死んだらダメなのか？』
「人柱力だからね。殺すと里のパワーバランスがゴニョゴニョで大変だから。」
それはともかく、あのオートでの絶対防御は厄介だ。
原作では…サスケの千鳥で貫かれていたが…原作崩壊がある今、それよりも固くなっている可能性もある。
そう言えば、私のチャクラ性質って…どうなってるんだろ。
木遁が使えるので土遁、水遁、風遁の三つは確定だ。紙を買えなかった為、詳しく調べることが出来なかったのだ。
「…牛鬼、買い物行くわよ。」
『へいへい。』

「あ、あれ…牛鬼えもん、どういうこと？」
『牛鬼えもんってなんだよ…もう一度やってみ？』
もう一度チャクラを紙に流せば、シワになって焦げて湿って切れて崩れてしまった。
「つまり…どういうことだってばよ…」
『全部使えるってこった。』
「…ヒャッハー！神には出会えなかったがチートはあったぜ！もっと早く知りたかった！」
『…元々のスペックがチートなんじゃ…いや、何でもねぇ。』
修行が楽しく、あっという間に1ヶ月の時間は過ぎていった。
あ、ちなみに氷遁も使えました、はい。

って言うより血継限界の〇〇遁は全て使える感じ？
…今の所氷遁はシャーベットを作る事にしか使ってねぇがな！
これも魔法（忍術）の一つの使い方なのだよ！むしろ平和になればこの使い方が主になるのだよ！

第14話

「やぐらさんの前で無様な姿は見せられないよね。」
『そうだな。』
試合会場は雲隠れの忍が出ていないのにも関わらず、熱気に包まれていた。
ボクシングを見る感覚で殺し合いを見るのに人柱力は怖がって避ける矛盾に何とも言えない気持ちになるが、それはそれ、これはこれなのだろう。
「第一試合、砂隠れの我愛羅対霧隠れのうずまきモエギの試合を開始いたします。
両者、前へ出てきて下さい！」
ステージに墨羽根で降り、我愛羅も砂で降りる。…舞台に降りると…緊張してきた。
「試合開始！」
薙刀を封印から取り出し、私がその場で一振りすると、砂の防御が〝何か〟に反応して防がれる。
風遁の飛ぶ斬撃で硬さを図ったのだが、新技は通りそうだ。
薙刀にチャクラを通し、炎が出てくると我愛羅へ向けて一気に振りかざす。
「はぁっ！」
砂に防がれ、反撃されるが…それを墨が防ぐ。
そのまま墨を足場にして叩きつけるも、避けられて地面に当たる。
ドッカーンッという音で地面が深く抉れ、当たった部分は一部ガラス化している。
…我愛羅が少し青ざめたのは気のせいだろう。
そのまま払い、砂で防がれるが砂が焦げて黒くなっている。
撃ち合いをする度に我愛羅の顔色が悪くなっていく。
汗も大量にかいている。
この熱さの攻撃を至近距離で防いでいるのだ。
…暑いだろうな。私の方へ熱が行かないようになっている分、我愛

羅はかなり熱いはずだ。
　このままでは決着がつかないまま我愛羅の恐怖を煽るだけなので、距離を置いて薙刀をしまう。
　…かなりホッとした様子だ。戦意喪失しているようにしか見えないのは気の所為だろうか。
「木遁・舞葉乱刃（ぶようらんは）」
　いわゆるはっぱカッターをかっこよく言っただけの牽制技。
　空を覆い尽くす程のはっぱカッターが時間差で我愛羅に向かう為、砂の防御はそちらに集中する。
「墨遁・鳥獣戯画（ちょうじゅうぎが）」
　サイのワザをぱくり、あたかも自分のワザのように墨の神獣達を繰り出していく。
　サイのものより強く、墨が切れる事がない上自分で書く動作も必要ない、人柱力だからこそのワザ。
　ウザイ程に時間差でやってくる舞葉乱刃と派手で高火力な鳥獣戯画に翻弄される我愛羅。
　砂の防御が追いつかなくなっていく。
　恐らく、普段は砂に任せっきりなため体術は苦手なのだろう。避ける事が出来ず砂の鎧を傷つけ、壊していく。
　トドメと言わんばかりに拳にチャクラを溜め、腹パン（桜花掌）を決める。
　我愛羅は壁に叩きつけられ、動けない。
　…もう会場がボロボロになってしまった。
「勝者、霧隠れのうずまきモエギ！」
　わぁーと客席から歓声が上がる中、我愛羅の方へ行って医療忍術治療する。
　我ながら人柱力相手にここまでの威力のパンチを出せるとは思わなかった。
『ゴリラか？目があった瞬間から腹パンしなかっただけマシだが…。』
　牛鬼は新技の実験台となる事が決定した瞬間である。
『すまん、マジですまんかった！』
「う…あ、俺は負けたか…。治療、助かった。ありがとう。」

「いえ、もう大丈夫？」
「あぁ、医療忍術の才能もあるのだな。…流石だ。」
頭を撫でられ、気持ち良く目を細める。
やはり、前世の前世は猫だったのだろう。記憶は無いが間違いない。
観客席の白と長十郎の近くに戻り祝福を受けると、視線を感じたので振り返ると我愛羅が私達をガン見している。
咄嗟に目をそらしてしまったが、２人も気付いたらしい。
「モエギ様にホの字ですね、アレは…。」
「アレは…恋の視線です…！」
「ホの字とか恋の視線ってどういうこと？」
『気付いてねぇのか？お前が医療忍術を使ったら顔が赤くなってたぞ？』
「それで頭ポンポンですよ!?」
「モエギ様もうっとりしてたじゃ無いですか！」
「うっとりはしてない！断じてない！私はやぐ…っ！とにかくしてない。」
『お前、無意識に小悪魔してるのな。』
「無自覚ですね。」
「無警戒ですしね。」
「…？」
「『天然って…』」
「皆して呆れないでよ…気になるじゃない。」
いつの間にか第三試合が終わり、第四試合が始まろうとしている事に、私達は気付いていなかった。
そして、水影席からの視線にも。

第15話

第四試合が終わり、第五試合に差し掛かろうとした瞬間…大きな蛇が観客席に現れ、あちこちから悲鳴が上がる。
尻尾で近くにいた忍達を一気になぎ倒し、観客は逃げていく。
「白、長十郎！」
２人にも羽根を出し、一斉に蛇へ飛びかかる。
連携の攻撃により、一瞬で細切れになった蛇。
蛇と言えば…保護者(大蛇)丸が咄嗟に思い浮かぶ。
だが、この世界では大蛇丸は指名手配もされていないしS級犯罪者でもない。
木ノ葉の上忍だ。
ならば、誰が…そう考えていると、突然その場のチャクラの流れが変わる。
「…！五影のいる所に結界が…！」
「モエギ！無事か!?」
「我愛羅…私は大丈夫。五影のいる所に結界が張られた…尾獣の力を借りられないように細工されてる。」
上から見れば、五影と侵入者が戦闘になっている。私はその侵入者の１人、赤髪の男性を見て目を見開いた。
護衛達は…ウタカタ以外全員弾き出されたらしい。
恐らく、中に入ることの出来る人間も指定してあるかなり高度な結界。
外の人間が必死に解こうとしているが…封印術特化の人間が付きっきりでようやく解けるような結界だ。
解けそうもない。
「何が…目的なんだ…！」
我愛羅の父親も中にいるため、心配なのだろう。
焦りが見える。
「恐らく…尾獣、かしら。」
「尾獣？なぜ…」

「波風ナルトは火影の息子、貴方は風影の息子、私は…水影の…まぁ、危機になれば助けに入るような仲ね。
五影を囮に、一尾、三尾、六尾、八尾、九尾の人柱力が一気に手に入る可能性がある。
そうなれば、中忍試験で雲隠れに集まっている残りの人柱力…二尾、四尾、七尾も私達を囮にして奪える。
タダでさえ私達は受験者で体力的には万全では無い。能力に制限を掛けて、弱体化させると…。」
『あの結界の中じゃ、俺も外に出れねぇ。
墨は使えるだろうが、補正は効かねぇから弱体化は避けられん。…どうする?』
「私は行く。…罠でも、やぐらさんを見捨てるくらいなら一緒に…。」
「俺も、父上を助けたい。砂が使えるかは分からないが…」
「使えると思うわよ?多分、その砂は尾獣由来っていうより…まぁ、いいわ。一緒に行きましょ。」

薙刀で倒れたやぐらさんに切り掛る所だった赤髪の男性—穢土転生された者の特長的な目をした父、ハクレンの薙刀を受け止める。
「モエギ…なんで入ってきた!」
「助けに来たかったから。…お父さん、久しぶりです。」
「モエギ…大きくなったな…。…ごめん、隣の奴に…操られてる。抵抗が出来ない。」
「見れば分かります。だから…私が、助ける。」
「済まない。」
薙刀同士の戦いが始まった。
キン…と鋭い音と共に、火花を散らす。父の猛攻に、封印術を使う暇もない。
隣を見れば、剣を10本以上も浮かせて攻撃する男。

こいつが、術者。
「…ハクレン、止まれ。」
男の命令に、父は私から離れた。
私の方へ向き、話しかけながらも各人へ剣での攻撃は辞めない。
あちらは我愛羅が砂で対処してくれているようだ。
「親子の感動のご対面を邪魔して悪いが…何故水影を…やぐらを助ける。父親の、仇だというのに。
憎いだろう？お前の父親は、やぐらにころ」
「違う。」
「違わない。お前の父はやぐらを庇って死んだ。殺されたんだよ、やぐらに。
俺の所に来れば、また父親と生活できる。…悪い話じゃない。一緒に五大国を乗っ取ってみないか？」
「…父は自分の意思でやぐらさんを助け、人間として死んだんです。
貴方にあやつり人形にされる為に死んだんじゃない！」
「そう…だ。やぐらが無事で良かった…」
「くっ…抵抗を…自我は残せんか。命令だ、やぐらを殺せ。」
「金剛封鎖！」
私から鎖が飛び出すと、父に巻きついて地面に拘束する。
…自我を無くせば弱体化し、封印も可能になった。
「…やぐらさん！」
怪我をして動けないでいるやぐらさんの方へ、全ての剣が向かう。
何本かは弾くが…間に合わない。
お腹が、胸が熱い。
「…モエギっ！」
やぐらさんの焦った声が遠くから聞こえる。
剣が私から引き抜かれ、男が驚いた顔をする。
「何故…そこまでする！致命傷を負ってまで助ける！」
「…私は…やぐらさんが…大好きだから…！」
息が苦しい。
だが、印を結ぶ。

「創造…再生・白毫…の術！」
額から模様が全身に伸びて、みるみるうちに傷を再生していく。
驚きで固まっている男を、思いっきり殴りつければ、ドッカーッンと大きな音を立てて沈みこんでしまった。
そのまま封印術を使用する。
結界もチャクラを溜めて蹴ると壊れ、護衛達が五影に駆け寄る。
「やぐらさん…！」
私もやぐらさんに近づき、治療を開始する。
足を切られて脇腹を刺されていたが、致命傷は避けられていた。
額の白毫は消えたが…1日経てば復活するだろう。
治療を終えると、ドスッと飛び込んで来た人間が2人。
「モエギ様！」
「無事で良かった…！」
気持ち悪い位の泣きようではあるが、私の責任でもあるため諦める。
『二人共…いい加減離れろ、ウザイし暑苦しい。…モエギに嫌われるぞ？』
2人は離れ、私の前へ正座する。
「牛鬼…手懐けたわね。」
『俺は適応力が高いからな。こいつらが何を嫌がるかは大体分かる。モエギ、そろそろ眠いだろ？』
「ん…」
返事をする前に、意識は沈む。
最後に見えたのは、やぐらさんの心配そうで今にも泣きそうな顔であった。

第16話

「モエギ…！」

モエギが意識を失い、その場に倒れ込む。

上半身を抱き上げて小さな体を抱き寄せ、ボロボロになって穴だらけの忍装の上から水影のマントを掛けて隠す。

『チャクラの大幅な乱高下による一時的な昏睡。宿で寝かせれば大丈夫だ。

…白、こいつの新しい忍装を買ってきてやれ。』

「はい！」

モエギの服のサイズを知っているのだろうか…いや、知ってそうだ。

「あの男は雲隠れのS級犯罪者、ヘビロク。

人柱力達が揃ったこの日を狙い、襲撃を掛けた。幸い死者はおらず、怪我人の治療も終了した。

…中忍試験は中止とする。昇級は各里で決めてくれ。」

人柱力と五影が参加する会議の最中、俺はモエギの心配ばかりをしていた。

白毫の術を解放し、創造再生まで使ったモエギは今も寝ている。

幾つもの剣がモエギに刺さった時には、心臓が止まるかと思った。

…寿命を減らしてまで俺を助けたモエギ。

『私は…やぐらさんが…大好きだから…！』

大好き、とは…大好きと言っても色々ある。

親愛、友愛、敬愛…恋愛。

出来れば、最後であって欲しいと思うのは我儘なのかもしれない。

第一試合が終わり、対戦相手の我愛羅を治療したモエギ。そんなモエギに、我愛羅は…頬を染め頭を撫でていた。

気持ち良さそうに目を細めているモエギと頬を染めている我愛羅を見て、黒い感情で心が埋め尽くされた。
あぁ、俺はモエギの事が―。
この時、ハッキリと自覚した。
見て見ぬ振りをしてきた感情に。
好きになってはならないと無意識にストッパーを掛けたが、感情が無くなった訳ではなかったのだ。
嫉妬の権利など、俺には無いのに。
先生が穢土転生された時、動揺し怪我を負った。
ゾンビのようなものだと分かっていても、あの日の負い目から先生に本気になる事が出来なかった。
『…父は自分の意思でやぐらさんを助け、人間として死んだんです。
貴方にあやつり人形にされる為に死んだんじゃない！』
『そう…だ。やぐらが無事で良かった…』
その時に、やっとシコリが解された気がした。
「それにしても…うずまきモエギのアレはいったい…模様が現れたと思えば急にスピードもパワーも上がっていた。」
「それに、あれほどの怪我…それも致命傷を一瞬で…俺も医療忍術が使えるから分かる。あれは医療忍術というより、再生能力に近い。
…あれほどの術、リスクも大きいのでは？」
雷影と金髪の側近が口にしたので、答える。
「うずまき一族に伝わっていた白毫の術ですよ。修得には精密なチャクラコントロールが必要で、長い年月…年単位で額にチャクラを溜め、陰封印・解で解放する事でパワーアップ、スピードアップを見込めます。
創造再生・白毫の術はその白毫の術とセットの術で、致命傷を負っても傷ついた細胞を再生する力。…人間の一生で細胞分裂の回数は変わらない為、寿命を減らすことになります。」
「寿命…！」
全員絶句している。
「…うずまきと言えばゴキブリ並の生命力と長寿、封印術に長けた一

族…。」
「僕の亡くなった妻も、うずまき一族でしたよ。…出産で弱って九尾を抜かれても、数分は生きていた。」
人柱力は尾獣が抜かれると即死するのは、常識だ。火影の言葉に皆黙り込む。
微妙な空気のまま、その日は解散となった。
明日、試験に参加した人柱力達の結果発表式をすると最後に通達された。

宿のとある一室に、俺やウタカタ、メイ、モエギと白と長十郎が集まっていた。
水影とその護衛と、中忍試験の本戦出場者だ。
「全員上忍に昇級だ。おめでとう。」
俺がそう言うと、3人ともポカーンとしている。
「ぼ、僕達が上忍!?なぜ…モエギ様だけでは…そもそも僕達は試合も行っていません!」
「モエギ様はともかく…僕達はまだ弱いのに…上忍になって大きな任務が務まるとは思えません!」
「私が上忍?なんで…」
「お前らが倒したあの蛇…雲隠れの上忍が束になっても倒せないような忍蛇だ。
それを連携して一瞬で倒したそうではないか。
それに、第二試験の結果も鑑みた。
…天の巻物7個、地の巻物8個を集めた上史上最速でゴールするやつらのどこが弱いんだ。」
「1人1人が下手な上忍より強い上、連携が上手い。…俺が尾獣化しても3人には勝てないかもしれん。」
「「…。」」
今まで自分達の強さを分かっていなかったらしい。呆然としてい

る。
情報を並べてみればどれほど規格外なのか良くわかる。
「モエギ、明日は試験に参加した人柱力達の結果発表の会が朝の１０時からある。
全人柱力と五影が参加するお茶会みたいなもの…らしい。宿の部屋に迎えに行くから用意して待っているように。」
「は、はい。」

第17話

自分の部屋に戻って、壁にもたれかかりずるずると座り込んでしまった。

『私は…やぐらさんの事が…大好きだから…！』

無意識にみんなの前で言い放った言葉。

確かにどういった〝好き〟かは言ってないが、命を掛けたあの場面で、大勢の前で言ったのだ。

五影や護衛、人柱力達など、大勢の人の前で…大好きだからと言ってやぐらさん庇った。

…明日の集まりが不安でいっぱいだ。

やぐらさんの方はと言うと、普段と態度が変わらなかった。

やぐらさんは意識をしていない…？

別の意味で不安が膨らむ。

『直接聞けよ…やぐらに、どう思ってるのかを。』

「それが出来たら…全世界の恋する女の子は苦労してないわよ。」

朝の9時30分。

白が買ってきた新しい忍装に身を包み、髪をまとめてやぐらさん達が来るのを待つだけとなった。

…サイズを何故知っているのかだとか、どうやって買ったのかなどは怖くて聞けなかった。狂信者コワイ…

「あ、来た…！」

やぐらさんのチャクラを感知し、部屋の前に出る。

「やぐらさん、おはよう。」

「あぁ、おはよう。」

頭を撫でてもらい、目を細める。

やぐらさんに撫でてもらうのが一番気持ちいい。
気持ち良さげにする私に嬉しそうにするやぐらさん。
「…ウタカタ、本当にこれで付き合って無いの？」
「らしい…ぞ？秒読みだとは思うが。」
２人の会話が聞こえ、私達はパッと離れる。
頬が赤くなっているのがわかる。
「お、おはようございます、ウタカタさん、メイさん。」
『動揺しすぎだろ…目がめちゃくちゃ泳いでるぞ。』
「さ、さあ…行こうか！」
『やぐらも動揺してるね～』
『だな』
「ウブすぎない？アカデミー生でももう少し進んでるわよ!?」
「２人はこんな物だろう。磯撫や犀犬よりも進むスピードが遅いのは今に始まった事じゃない。」

「え～試験に参加した三名の結果発表を行います。波風ナルト、我愛羅、うずまきモエギは前に出て来て下さい。」
雲隠れのシーが前に出て言った。
「波風ナルト、我愛羅は中忍へと昇格。
うずまきモエギは上忍へと昇格と決まりました。」
「モエギが上忍ってどういうことだってばよ！」
「第二試験を史上最速で、しかも巻物を計１５個も手に入れたからな。しかも、乱入者の対処も行い上忍でも手こずる忍蛇を班員と連携して一瞬で倒した。
上忍にならないと実力的に釣り合いが取れんだろう。」
シーの説明に騒いでいたナルトは納得し、黙る。
が、私を見てニヤリと笑う。
「それにしても…ちっちゃい水影のどこらへんが好きなんだってばよ？

いや～熱い告h…痛ってぇ！」
余計な事を口走った為、腹パンを決める。
なにすんだってばよ！などと騒いでいるが…自業自得である。
「…で、どこらへんが好きなんだ？」
「な…我愛羅まで…！」
絶対防御で殴ろうにも殴れない。って言うより悪気が無いからやりづらい！
顔が真っ赤になり、何も言えない。
『あぁ、コイツは…グヘッッ！…尾獣の俺でも苦しいぞ、これ…。』
牛鬼（バカ）の首を絞め、黙らせると、ここである事に気付く。
…みんなの前、大声で喋っている。
つまり…周りからの生暖かい目線が集中している。やぐらさんは…耳まで真っ赤にして机に突っ伏している。
か　わ　い　い　！　！
照れているやぐらさんは、天使が舞い降りたかのような可愛さだ。
赤くなっている事に、期待してしまうが…よく考えれば大好きってみんなの前で言われてるから照れているのだろう。
『モエギ、もうみんなにバレてるんだからハッキリ言えよ…やぐら、お前も薄々気付いてんだろ。男なら根性見せろ！』
牛鬼の激励に、やぐらさんが立ち上がる。
顔を赤くして近づく姿は可愛い。
やぐらさんは私の前に立ち、言った。
「モエギ、俺は…」

第18話

「モエギ、俺は…モエギの事が好きだ。
　我愛羅に頭を撫でられたモエギを見て、嫉妬した。モエギの事が大好きだから…無茶はしないでくれ。
　モエギがいなければ…どうやって生きていけばいいか分からなくなる。」
　顔が、熱い。
　頭が真っ白になりそうなのを堪え、答える。
「やぐらさん…私も…やぐらさんの事が大好き。
　でも…あの時と同じ状況になれば、きっと同じ事をする。
　やぐらさんの事が…大切だから、傷ついて欲しくないし、いなくなって欲しくない。」
「モエギ…」
　そっと抱き締められてやぐらさんの肩に顔を埋めると、やぐらさんの匂いがした。

「それにしても…このお菓子、砂糖が多すぎやしませんか？めちゃくちゃ甘い。」
「奇遇だで…儂のブラックコーヒーもいつの間にか砂糖が入って飲みにくい。」
「バカップルはどうしようもないってば…下手に煽らなきゃよかったってばよ…」
「でも、２人とも幸せそうで良かったじゃないか。見てて胸焼けするけど。」
　散々な言われようではあるが、ようやく両片思いが実ったのだ。
　これでも（私は）自重しているつもりである。
「モエギ、チョコ食べる？」
「モエギ、リンゴジュースとオレンジジュースどっちがいい？」

「モエギ…リスみたい…可愛い。」
私は自重しているが、私をとことん甘やかすのはやぐらさんだ。
私が何かする度に頭を撫で、何もしていなくとも頭を撫でる。
頬を触りキスをして抱き締める。
スキンシップが激しいのは…お互い様だろう。
やぐらさん…幸せそうで可愛い。
頬もフニフニで柔らかいし、髪も柔らかい。
抱き締められると暖かいしいい匂いがする。
「やぐらさん、好き。」
「俺もモエギが好きだ。」
「ふふっ…一緒だ。」
「あぁ、そうだな。」
その日のお茶会は、苦いものや辛いものが全てなくなり、甘い物は残るという異例の事態となった。

お茶会も終わり、各自部屋へと戻っていく。
部屋の前でやぐらさんに壁ドンをされている私と、うっとりしているやぐらさん以外は。
「モエギ…可愛い。もっと…モエギの事が知りたい…。」
「私も…やぐらさんの事、知りたい。」
周りからのあぁ、またかといった視線は放置し、堂々と砂糖を振りまく私達。
気が済んで部屋に戻ったのは三十分後。
『お前ら…今までの分取り返すかのようにいちゃいちゃしまくってるな…。』
「やぐらさんが好きだから…触れ合いたいだけだよ?」
呆れた様な牛鬼だったが、何も言わず具現化を解く。私も眠くなってしまい、そのままベッドで眠った。

第19話

次の日、私達は霧隠れへの帰路についた。
墨羽根を全員に出し、飛んで帰ったら慣れていないやぐらさんやウタカタさん、メイさんは酔ったり震えたりして○|？|＿の状態になっていた。
思わずやぐらさんに駆け寄り、頭を撫でてしまう。
「あ、水影様が復活しました…」
「流石モエギ様ですね。」
「水影の表情が溶けてるぞ…俺が居ない間に一体何があった…」
一連の流れを知らない再不斬は、浦島太郎のようになっていた。
離れていたと言っても、一日、二日程なのだが。
「牛鬼、可哀想な再不斬先生に説明してなさい。」
『あいよ。再不斬、俺が説明してやる。』

「おめでとう会？」
「ん、上忍昇格祝いをしようとしたんだが、アイツら(狂信者)が〝モエギ様の片思いが叶ったから豪勢にしなければ〟って張り切ってな。
…どこぞの結婚式場だと突っ込みたい程の所を探してんだ。お前の為に止めようとしたんだが…流石狂信者だな。
話聞かねぇ。」
「…ちょっとお話(物理)してきます。」
「なんか途中で変なもん混じって無かったか？」
ごちゃごちゃ言う再不斬はさておき…ＯＨＡＮＡＳＩ(物理)は成功し、ちょっと豪華目のご飯になった。

上忍昇格から2週間。

上忍としてさくっとAランク任務を終わらせて水影様に報告をした私達は衝撃の内容を告げられた。
「…へ…？」
「えっと…？」
「うん…？」
ポカーンとなりマヌケな声を出す私達。
だが、水影モードのやぐらさんはもう一度言い聞かせるように話す。
「3人に来年度のアカデミー卒業生…新しい下忍達を受け持って貰おうかと思ってね。」
「やぐ…んんっ、水影様、私達は一応今年忍になったばかりですよ？
確かに上忍ですが…私達は年齢がアカデミー生とたいして変わらないのに…」
「アカデミーからの要望が来てたんだ。努力家で実力者で若くして上忍になり、人格的にも問題ない。
半年弱の間に班長としての経験を詰んだ後、来年から上忍師として頑張ってもらうから。」

水影決定にそれ以上は言えない。
つまり、来年からは先生と呼ばれるハメになる。
…よく考えたら、今までと行動は変わらない。
試験をして信者と同じようにしごき、細かいところは牛鬼に丸投げする。
生徒が狂信者達から普通の生徒に変わり、責任が伴うだけで…。
そもそも、上忍になれば高ランクの任務が殆どとなる。
半年ほど頑張れば上忍師として働くため、低ランクの任務が主となる＝死亡率が減る？
ただ、致命的に威厳と年齢が足らずに舐められやすい気がする。
それもちょっと調教（育）するだけで問題ない…か？
色々考えながら、家へと帰った。

「おかえり、モエギ。お疲れ様。」
「た、ただいま？なんで…」
『お、ショタ影じゃねぇか。お前さっきまで水影ごっこやってただろ？モエギより早くモエギの家にいるってどういう事だ？』
「ショタ影じゃない！水影なの、水影ごっこじゃなくて本物の水影様なの！」
　ムキになってる…可愛い。
『ほら、モエギも可愛いって言ってるぞ？』
「…む…お、俺は大人だからな。心が広いからショタ影などと言われた位では怒らん。」
　ドヤ顔で言うやぐらさんの頭を撫で、話しかける。
「やぐらさん、私より早かった。…なんで？」
「この…可愛いな、こんちくしょう！」
　頭を撫で回され、抱き寄せられる。
　やぐらさんと恋人となり、私の家の合鍵を渡してからというものちょくちょく来ているやぐらさん。
　だから、家にいること自体は普通であるのだが…。
「飛雷神のやり方を教えてくれただろ？
　だから、玄関前にマーキングしといたんだ。」
　そう、四代目火影の術、飛雷神を教えたのだ。
　元々木遁飛雷神や墨遁飛雷神という自分の作り出した木の付近、又は墨マーキングの所へ飛べる術は開発していた。
　それの応用で普通の飛雷神を使える様になり、それをやぐらさんに教えた所…簡単に使えてしまった。
『…モエギの風呂覗くなよ。後で浴室にマーキングが無いか調べてやるよ。』
「な、ななな…そん、そんな事しないし！」
「やぐらさん、覗いちゃダメだよ？」
「可愛いな、モエギは…」

『はい、ストップ！やぐら、モエギちゃんに言う事あるでしょ？』
ペシペシと平らな尻尾でやぐらさんの頬を叩く磯撫。
それで我に返ったのか、喋り始めた。
「別に大した事じゃないんだが…モエギのチャクラ性質を調べさせてほしいんだ。」
差し出したのは、チャクラ性質を調べる紙。
私は頷き、紙にチャクラを流す。
当然、全ての反応を示して崩れてしまった。
「やぐらさん…」
か、固まってる…。
可愛い姿に思わずやぐらさんの頭を撫でる。
それで再起動したやぐらさんは、私の頭を撫で返す。
「可愛い…モエギ、可愛い…」
『結局それを口実にいちゃいちゃしに来ただけかよ…』
「ち、違うし…モエギの事をいっぱい知りたいだけだし…甘えん坊のモエギが可愛すぎて甘やかしたくなるだけだし…。」
『それを世間一般ではいちゃいちゃって言うんだよ、やぐら。』
『尾獣に世間一般とか言われてやがる…さすがショタ影。』
「ショタ影じゃないっ！」
「…やぐらさんはショタ影でも可愛いよ？」
「し、ショタ影じゃ無いし…」
「可愛いからいいの。」
抱き締めると大人しくなり、抱き締め返してくれたやぐらさん。
「俺、一応年上なんだがな…」
しょげて可愛い事を言うやぐらさんにキスをして口を開く。
「そんなやぐらさんが…好きだよ。」
『いつでもどこでも砂糖を製造しやがって…』
『やぐら…顔が溶けてる…』
尾獣達は外野で何か言っていたが、幸せな時間は過ぎていった。

第20話

この半年弱の間、A、Sランク任務を受けたりやぐらさんといちゃいちゃしたり狂信者を調教したりやぐらさんと会ったりと忙しい日々を過ごした。

「今日から貴方達の担当上忍になった、うずまきモエギよ。取り敢えず自己紹介をしてちょうだい。

名前や好きな物、嫌いな物など…好きなように言ってね。」

「僕の名前はタスクです。好きな物は…石集めで、嫌いな物は怖いものです。えっと、宜しくお願いします…。」

黄色の髪の男の子。

資料によると性格は気弱で、体術が苦手で忍術はトップクラス。

「俺、ミロクってんだ。好きな物は猫で、嫌いな物は玉ねぎ。こいつはぺぺ、俺の相棒だ！」

茶髪の活発そうな少年は、代々忍猫を育てる家系らしい。今も肩に白猫を乗せている。

体術がトップクラスで座学は後ろから数えた方が早い。

「私はユキ。好きな物は修行、嫌いな物は騒がしい人。」

座学、体術、忍術全てでトップを取った女の子。

黒髪をお団子にまとめ、クールな印象を受ける。

「3人にはこれから下忍になるための試験を受けてもらいます。」

「おい、まて…試験ならアカデミーの時に…！」

「そうです、試験など無駄です。」

ユキとミロクは不服そうに声を上げる。

タスクも不安で泣きそうになっている。

「アカデミーで受けたものはあくまでも〝アカデミー卒業試験〟よ。

下忍になりたければもう一度試験を受けてもらいます。」

「あ、あの…その試験の内容は？」

「ん、これよ。」

タスクの疑問に私はあるものを取り出した。

赤と青の巻物—2本しかない。

「これから三十分、なんとしてでも…殺す気でこれを奪い取ってみなさい。
貴方達と年齢が近かろうが私は上忍。…手加減はしてあげるけど、簡単に取れるとは思わないこと。
巻物は見ての通り2本しかない。だから…強制的に1人はアカデミーに戻ってもらう。
じゃあ、始め！」
見えやすいように腰のポケットに巻物を入れ、その場を立ち去る私。
まぁ、鈴取りの巻物バージョンである。
3人の気配は…その場で動いていない。
「牛鬼、3人は？」
『どうやって取るか相談してるぞ。…あと、ミロクがお前の事弱そうだってさ。』
「よし、後でしめる。」
この時、ミロクは謎の悪寒に襲われる事になるのを私達は知る由もない。

「…出てきたらどうなの？」
「さ、流石上忍ですね。…勝負、です。」
出てきたのは以外にも気弱なタスクであった。
私はタスクに向き合う。
（…三割位の力でいいか。）
タスクが動き出す前に、印を結ぶ。
「霧隠れの術！」
「うぇっ…ふぇぇ…ううっ…見えない…」
めっちゃ動揺してる…霧隠れの術で動揺するって…。
気配を消すこと無くタスクに近づくと、脇腹を蹴って飛ばす。
悲鳴を上げる間もなくタスクは意識を失ったらしい。タスク、死ぬ

なとミロクが叫ぶ声が聞こえる。
…あれ？
『お前…手加減下手くそだな…。』
取り敢えず霧を払い、状況を確認する。
物陰にはワイヤートラップが途中まで設置されており、木の上には動揺して固まっているユキがいた。
私はタスクに近づくと医療忍術を掛けて問いかける。
「タスクが注意を引き付けてユキが死角の木の上から攻撃し、ワイヤートラップへと誘導。
失敗したけれど、中々連携が取れているわね。
でも成功しても巻物は2本しかないけれど、どうするつもりだったの？」
「「3人で落ちる（ます）」」
「…その心は？」
「誰かが犠牲になってチームワークが崩れる位なら、3人で落ちて来年頑張る。」
「誰かを踏み台にして忍者になっても胸糞悪いだけだ。」
「ぼ、僕達は三人一組です。…1人だけ落とすなんて出来ません。」
「…3人とも合格よ。
忍びの世界でルールや掟を守れない奴はクズ呼ばわりされる。でも…仲間を大切にしない奴はそれ以上のクズよ。
同じクズなら自分が守りたい物を守りなさい。
…明日からは本格的に任務を開始する。第2演習場に朝8時に集合。では、解散。」

カカシ先生の言葉をパクって…代用し、私はその場を立ち去った。
私を弱そうなどと言ったミロクは、一週間もの間くしゃみが出そうで出ない謎の症状に悩まされる事となった。

第21話

「今日は…畑の収穫お手伝いね。
早めに終われば修行にしましょう。」
そう言った私に、３人は不満を口にする。
「なぁ、先生…またこんな手伝いばかりなのか？」
「下忍とはいえ、忍者を畑の収穫お手伝いに駆り出すのは非合理的かと思います。」
「…忍者じゃ無くても…出来る。」

下忍になり２週間。
やはり、不満が爆発している。
「不満は尾獣無しの私から一本取ってから言いなさい。
実力もない癖に口ばかり動かさないの。早く終わらせれば稽古をつけられる時間も増えるのよ？
修行をすれば実力も上がって高ランク任務にも行ける事が分からないの？」
バカなの？死ぬの？と言わんばかりの正論に、３人とも黙る。
白や長十郎の班も似たような不満が出てきているらしい。
２人とも私がシゴいた実力者だ。
武器や忍術を出さずに３人同時に相手をして、実力の差を見せつけてどちらが上か調教しているらしい。
私達は年齢や見た目で判断すれば痛い目にあういい見本である。
一応報告書にも３人が拗ねている事を書いておいた。
３人をシゴいてから白、長十郎と共にＡランク任務をその日のうちに終わらせ、帰宅した。

「今回、モエギ班にＣランク任務を言い渡す。
盗賊の討伐又は拘束だ。」

表情に喜びを滲ませた3人。
3人を見るやぐらさんの表情は水影モードだ。
「霧隠れの里付近の森に、10名弱の盗賊が潜んでいる。忍の存在は確認されていないが、武器を持っている。
拘束は出来たらで構わない。…怪我はするなよ。」
「「「はっ！」」」
それから忍具の調整などの時間をとり、アジトへと向かった。

私達は、情報にあった森のアジト上空にいた。
「では、作戦通りに行動して頂戴。散！」
私は今回、手出しは殆どしないしない予定だ。
上から確認し、危なくなれば飛雷神で助けに入る。
降りていった3人は、盗賊達を逃がさぬように簡単な結界を張ってから討伐に差し掛かる。
盗賊の殺気で動けない…なんて事も無く、順調に討伐していく。私が普段から殺気に慣れさせておいた3人は、余程の事が無いかぎり怯む事は無いだろう。
（お、リーダー格は拘束してる…関心関心。）
盗賊の中で、一番拘束した方が良いのはリーダー格だ。
盗賊達がどこに繋がっているのか、他の潜伏している盗賊はいないのかなど、情報を持っている可能性が高い。
15分で全て終わり、私も下へ降りていった。

第22話

「皆、よく頑張ったわね。」
水影様に報告を済ませた後、私が褒めると3人は顔を綻ばせた。
何だかんだで気を張っていたらしい。
「先生…怖かった…！」
「はいはい、良く頑張りました。」
タスクはふええ…と泣きついてきた。
抱き着かれたので、ポンポンと頭を撫でる。
だが、私は知っている。
ニヤァ…と笑みを浮かべながらチャクラ解剖刀（メス）で盗賊達を倒していき、盗賊の殆どをタスクが倒してしまっている事を。
臆病な性格で繊細なチャクラコントロールに長けていたタスクは、医療忍術に向いていた。
私が基礎から教えていけば、みるみるうちに吸収し、霧隠れでも上から数えた方が早いレベルの医療忍術の使い手になった。
そして、私は白毫の術の溜め方を教え、タスクは時間を掛けてチャクラを溜める事になった。
必然的に使えるチャクラは減り、全力は出せないはずなのだが…他の2人よりも強い。
恐らく、アカデミーでは臆病な性格故に全力を出せずにいたのだろう。
私との修行や任務では全力を出さねば死ぬかも知れない状況で、無意識に全力を出している。
それに加え、医療忍術の応用である桜花衝やチャクラ解剖刀（メス）を武器としている。
間違いなく、下忍になってから1番成長しているのはタスクだ。

「む～…。」

「やぐらさん…可愛い…。」
「可愛い言うなし。モエギの方が可愛いし。」
夕方、やぐらさんが飛雷神でやってきた。
だが、お昼間に抱き着いてきたタスクを撫でていた事に嫉妬して拗ねているらしい。
「やぐらさん、好き。」
「な…な…す、好きで誤魔化そうとしてもダメだからなっ…。
ぷぅ…!」
頬を膨らませ、怒ってるんだぞとアピールするやぐらさんだが、私が可愛さに蕩けた顔をするだけであった。
「だって…やぐらさんの事…好きなんだもん…。」
「…無防備に男に抱き着かれてちゃダメだぞ。
モエギは可愛いんだから…勘違いした男がモエギに迫ったらどうするんだ。
モエギに抱き着くのも、抱き着かれるのも、俺だけでいいの。」
なにこの可愛い生き物…!
思わずやぐらさんの胸板に飛び込み、頬ずりしてしまう。
「分かった～やぐらさん、好き。」
「俺も、モエギが好きだ。」
「やぐらさんも…私以外の女の子に抱き着かれちゃダメだよ?
…やぐらさんの事、好きな子はいっぱいいるんだから。」
唇を尖らせながら言うと、可愛い…嫉妬可愛い…独占欲可愛い…と蕩けた顔で言い始めた。
「もう…可愛い!」
我慢ならないとばかりに抱き締められる。
ギュッと抱き締められているはずなのに、壊れ物を扱うかのように優しく抱き締めてくれる。
甘えん坊な私を、とことん甘やかしてくれるやぐらさん。
可愛くて、カッコよくて、優しくて、甘やかしてくれて、強くて、可愛い水影様であるやぐらさんは、かなりモテる。
熱い視線を向ける女の子はいっぱいいる。

やぐらさんが相手にしないのは分かっているが、やぐらさんの良いところは私だけが知っていればいいと考えてしまう。
嫉妬の感情を初めて知った私は、自己嫌悪に陥ったが…可愛いやぐらさんが、私に嫉妬と独占欲を発揮してくれたお陰で自己嫌悪から抜け出せた。

「だぁっ！先生、手加減しろよっ！上忍だろ？」
『弱そうなどと口にしながら手加減してもらわなければ勝てねぇのか？』
「最初の事をネチネチ言ってんじゃねぇ！」
「ミロク、敵が貴方の実力に合わせて手加減してくれるとでも？
先生に手加減してもらわなければならないようじゃ生き残れないわよ。」
「ユキの言う通りよ。
１０分の休憩を与えます。その間に体を休め、３人で戦略を立てなさい。」

初めてのＣランク任務から、半年弱の時間が流れていた。
もうすぐ中忍試験だ。
今回は木の葉で行われる予定だ。
霧隠れから出るのはモエギ班、長十郎班、白班だ。
私達が手を挙げると、他の上忍は辞退してしまったので、出場する全班がルーキーとなった。
木遁飛雷神で全員を送る予定なので、ギリギリまで修行を行う。
中忍試験まで、後３日。